

# 『文化相対主義』再考

## 異文化コミュニケーション教育に関する一考察

### Cultural Relativism Reconsidered A Thought on Intercultural Communication Education

(2000年3月31日受理)

佐生 武彦  
SAIKI Takehiko

Key words : 異文化接触の型, 文化相対主義, 日本的コミュニケーション型,  
相対主義的同化型コミュニケーション

#### はじめに

文化相対主義はその所論の一つとして、「他の文化に見られる異なった習慣や行動様式等を自文化の価値基準で評価・判断することを避け、寛容な態度で臨むことの必要性」を説いている。ハンソン<sup>(1980)</sup>の言う「評価的相対主義」<sup>1)</sup>である。異文化コミュニケーションの分野では、諸個人が潜在的に抱くとされる自文化中心主義を抑制するための対抗概念として教授される場合が少なくないが、この論説を積極的に支持するか否かは論者によって異なるようである。岡部<sup>(1987)</sup>は、「・・・この立場は他者をいっさい価値判断してはならないというのではなく、ときには価値判断は必要であるし望ましい場合もある」<sup>2)</sup>と述べ、文化相対主義に対しては慎重な立場を採っている。また、「異なる文化に優劣をつけるような価値判断ではなく、異なる文化をありのまま受け入れ」<sup>3)</sup>ると述べ、「この概念を異文化コミュニケーションに携わる者の理想的態度として位置づける」<sup>4)</sup>として、文化相対主義に積極的な支持を表明する佐藤<sup>(1994)</sup>の立場がある。

筆者は、基本的に岡部の見解を支持する立場にあるが、文化相対主義の有効範囲はきわめて限定されたものであると考える。本稿では、筆者のこの見解を論考するために、まず、異文化接触の2つの型について考察し、続いて文化相対主義に見られる問題点を日本的コミュニケーションとの関連で検討したい。

## I. 異文化接触の2つの型

日本の武道の一つである空手には、個人が型を披露する演舞に加え、組み手と呼ばれる二者による技と力の競い合いがある。そして、組み手には「寸止め」と「フルコンタクト」の2種類が数えられ

る。「寸止め」とは読んで字の如く、相手の急所を打つ寸前で拳を止めることであり、「フルコンタクト」はその和製英語が示唆するように、相手の身体に接触することを意味する。「寸止め」に対する批判から登場した「フルコンタクト」であるが、「寸前で止めた拳が実際に相手の体を打つまでの一瞬間に、どのような変化が起こるかもしれず、寸止めによる勝負の判定はナンセンスである」というのがその批判内容と聞く。両者の違いは、言うまでも無く、相手に与えるダメージの有無にある。

唐突に空手の話を持ち出した理由は他でもなく、「寸止め」と「フルコンタクト」の2つのコンセプトをその字面だけでも拝借して、以下に異文化接触と文化相対主義の関係を論じてみたいと思うからである。

異文化接触の一つの型として、書物や映像を通して異文化に親しむことが挙げられる。比較文化論の講義などを通して、他の文化の習慣や生活様式を学ぶことがこの型である。また、最近ではニュースや海外ドキュメンタリ等のテレビ番組を介して茶の間で異文化との接触を経験する機会も多い。この型の異文化接触に共通する要素としては、1) 接触のあり方が片務的である、2) 接触のあり方がどこまでも間接的である、3) 接触に必要な感覚機能は視聴覚に限定されている、そして4) いつでも一方的に接触を解消できる、が挙げられるであろうか。このような文化接触のあり方を、空手の例に倣って、「寸止め型」と呼ぶことにする。異文化接触のもう一つのあり方として、「フルコンタクト型」が考えられる。この型の特徴は、「寸止め方」に備わる要素をすべて否定することで手に入る。つまり、1) 接触のあり方が双務的である、2) 接触のあり方が直接的である、3) 接触に際してはすべての感覚器官が動員される、そして4) いつでも一方的に接触を解消するわけにはいかない、ということである。本論の主題でもある、異文化間での対人コミュニケーションは、この「フルコンタクト型」の典型例である。

## II. 文化相対主義の問題点

前述した文化相対主義の論説（つまり、自文化の基準を以てする評価・判断の留保、及び異文化に対する可能な限りの寛容性）が、「寸止め型」の異文化接触においては十分にその効力を発揮するであろうことは想像に難くない。上に挙げた比較文化論の講義を例にとると、ここでは自己の文化と異なる他文化の習俗や慣習が紹介されるが、学習者はそれらを自文化の尺度を以て「奇異なもの」として眺めることを差し控え、多様な人類文化の一つとして理解することを学ぶ。なるほど、不快感や危害が直接身辺に及ばない「寸止め型」での異文化との接触であれば、文化相対主義に倣って、「自文化の基準に従えば確実に『劣っている』或いは『不衛生』と断定せざるを得ない様な事柄に遭遇しても、持てる限りの寛容さを発揮して、ただ『違っている』と構えることもできれば、固有の文化的特性として尊重すること」<sup>5)</sup>も決して難しいことではない。しかしながら、「フルコンタクト型」の状況における文化相対主義の実践には少なからず困難さが伴う、というのが筆者の見解である。

ここ十年ほどの間に、日本人による異文化交流は、量的な拡大に伴って急速に「草の根」のレベルに移行した。国内外における文化背景を異にする人々との接触は、言うまでもなく、「フルコンタクト型」のそれである。従って、文化相対主義の教授に際して、この論説の持つ意義（効力）が異文化接触の型の違いによって大きく左右されるであろう可能性に対しては、十分な配慮が必要であると思われる。

次のシミュレーションは、「寸止め型」の異文化接触では考慮されることのなかった「臭覚」が介入する「フルコンタクト型」の異文化コミュニケーション状況である。登場するのは日本人学生A君と異文化人B氏である。B氏が放つ異臭に困り果てたA君が、B氏との交流を継続するか否か、大学で「異文化コミュニケーション」を担当するC教授に相談する。C教授は、文化相対主義的なアドバイスを含み5つの選択肢を用意した。以下、5つの選択肢について考察を加えながら、「フルコンタクト型」の異文化接触における文化相対主義の問題点を検討したい。

#### 《異文化コミュニケーション・シミュレーション》

背景：ある宗教的理由から、可能な限り入浴を控える習慣を持つ文化集団があると仮定する。かれらの教義によると、聖霊なるものが入浴によって分離するらしく、祭儀の直前には特に厳しく禁じられているという。入浴回数が少ないせい、この文化集団に属する人々は相当な異臭を放つと言われている。

状況：「異文化コミュニケーション」を受講する学生A君が、この文化集団に属するB氏と交流の機会を持つことになった。しかしながら、B氏とのコミュニケーションを図る上で例の異臭が思わぬ障害になっている。A君は「どうしたらよいか」と担当のC教授に相談を持ちかけた。

#### 《指導内容の選択肢》

- 1) 自文化の臭覚尺度で相手の体臭を評価・判断する態度を排し、寛容な精神で相手とのコミュニケーションに臨むこと。文化の多様性を身をもって学習する良い機会である。
- 2) その人が日本で生活する限り、「郷に入れば郷に従え」とあるように、適度の入浴を行い、日本人が許容できる程度に体臭を抑えることがホスト文化である日本への礼儀だから、丁寧にその旨を伝えること。
- 3) 宗教上の理由による入浴回数の少なさに対する自己の理解を示した上で、結果的に付随する体臭に対しては率直に自己の見解（不快感）を述べ、交流の機会をなるべく相手の入浴後の早い時期に持つなどの案を提示してみること。
- 4) 電話かEメールなどのコミュニケーションに限定する。
- 5) 交流を見合わせる。

「フルコンタクト型」の異文化接触における文化相対主義の問題点を論ずる前に、「異質な文化的要素」を表現するにあたって、「体臭」を引き合いに出すなど、余りに「卑近に過ぎる」或いは「例外的」との批判があるかもしれないので、敢えて取り上げた理由を2つだけ述べておきたい。理由の一つは単純で、明快に問題点が把握できることである。次に、この種の状況は「例外」として論議に加えないとすれば、状況依存的で論理に一貫性を欠いた文化相対主義の論説は、学習者をいたずらに混乱させることになるため、むしろ積極的に議論の対象に据えるべきだと考えるからである。

上に記した5つの選択肢は、筆者に考えられるところを列挙したままで、包括的なものでは決していないが、ここでの議論には十分かと思われる。とりあえず、筆者の個人的な立場を述べておくと、アドバイスとしてA君に与える選択肢は3)である。この選択肢は、明らかに文化相対主義の立場ではない。なぜなら、B氏の体臭に対しては「寛容さ」を持ち合わせていなければ、臭覚の判断には己の尺度を用いているからである。2)の選択肢については、筆者自身が異文化にあって「常に行えるわけではない」という確信から、「郷に入れば・・・」の黄金律を支持できない以上、他者にこれを求める資格を有さない。更に、この選択肢は、一見妥当でもっともらしく見えるものの、文化を異にする者に黄金律の実践を要請するのであれば、本質的に自文化中心主義的であるというのが筆者の見解でもある。4)の選択肢については、ただ「面倒だ」という印象が強い。5)の選択肢に関しては、3)にある提案の結果次第では十分に考えられるところである。但し、筆者がA君の立場にあって、相手が興味深い人物であるなど、交流に意義が見いだせるのであれば、「鼻の息を止めて」でも、コミュニケーションに臨む可能性は大いにある。

最も相対主義的な選択肢である1)についてであるが、筆者がA君に対してこの選択肢を与えることはおよそ考えられない。大小合わせて4つの理由が考えられる。まず、異文化間で発生するコミュニケーション上の問題は、1)可能な限り当事者の間で確認し合い、2)ある種の交渉を介して、3)双方の「歩み寄り」によって妥協点を模索する、という一連の作業を通して解決に当たることが最も望ましいと筆者は考えるからである。これらの作業は、いわば共に寄って立つことのできる「第三の文化」を創造する営みであって、異質な文化の共生に不可欠なコミュニケーションの倫理を構築していく過程でもある。しかしながら、文化相対主義は「寛容と尊重」の論理であり、同時に文化の独自性や差異を強調する論理でもある。従って、選択肢が1)の場合、A君による一方的な相対主義の実践があるだけで、B氏の文化は現状で「固定」され、「肯定」されることになる。ここにはB氏の側に共生に向けての「自己変革」の必要もなければ、交渉を介しての「歩み寄り」が入り込む余地もない。

また、上述した一連の作業は、当事者間の「対等な関係」を示唆するわけであるが、このことはコミュニケーションを図る上で双方が請け負う必要のある「負担」の配分も可能な限り「均等」となることを意味する。1)の選択肢を「不適當」と筆者が考える2つ目の理由は、A君が被るであろう過剰な負担であり、これによって破綻する関係の対等性である。取り立てて問題化する必要も感じないが、「コミュニケーション権」とでも呼び得る権利が個人に備わっているものとするれば、コミュニケーションに配分される「苦楽」の著しい不均衡は、この権利の侵害と考えられるはずである。

3つ目の理由は、上で述べたコミュニケーション上の「負担」から予想し得る相互作用の顛末である。つまり、一方が片務的に示す寛容さに支えられたコミュニケーションは、いずれ寛容さの限界に到達した時点で破綻するということである。「なぜ自分だけが相手（の文化）を尊重し寛容な態度で接するのか」、「なぜ相手はこちらの文化を尊重しようとせず、己の文化を持ち込むのか」等々、寛容さの臨界点で脳裏を横切るこれら慷慨の言葉は、たちまち相対主義の立場を危ういものにするであろう。寛容さ（或いは我慢）の限界に達した時点で、「黙っていればいい気になって」と憤慨するようであれば、1)の選択肢は初めから避けた方が無難であるのかもしれない。

選択肢の1)をA君に推薦できない最大の理由は、日本人による相対主義の実践がときに「偽善」の様相を見せる場合があるという印象を筆者が持つからである。これは、日本人に顕著に見られる、相手への「一方的な相対主義的振る舞い」が、果たして真の相対主義と呼び得るのか、という筆者が抱く大いなる疑問とも関連している。以下、文化相対主義と日本人の関係を日本的コミュニケーション型との関連で考察し、「偽善の構造」を検討したい。

### Ⅲ. 文化相対主義と日本的コミュニケーション型

日本人が好んで用いるコミュニケーション型は、「建前と本音」或いは「清濁併せ飲む」等の表現が端的に示すように、「異質なものの並存」を可能にする「両立志向型」<sup>6)</sup>であると言われる。「異質なものの並存」と言えば、そのまま相対主義の世界であることに気付かされる。この両立志向型と日本人及び日本文化との因縁は深いようだ。日常生活における対人間のコミュニケーションを司ることは言うまでもなく、遅くとも飛鳥・奈良の時代に始まる日本の文化受容史を、この型は誘導してきたと言われる。<sup>7)</sup> いわゆる神・仏・儒の共存を可能にし、一軒の家屋に並存する洋間と和室の関係に見られるような、一方が他方に排除されることがなく新旧の要素が重層的に累積する稀な文化を築き上げてきた原動力が、このあまりにも相対主義的な日本人の両立志向性であったと思われる。

翻って、文化相対主義を初めに提唱した西欧人やそれを受け継いだアメリカ人の間では、「片立型」<sup>8)</sup>の志向性が顕著であるようだ。異質なものと相容れないものは、対立の過程を通して極力排除しようとする傾向が強い型である。個人のレベルにおいては可能な限り「イエス・ノー」を明確にすることで曖昧さを避け、他者とのコミュニケーションにあってはどこまでも己の主張を通そうとするところにこの型の特徴が見られる。ユダヤ・キリスト教という一神教の伝統に培われた「片立志向性」は、異質なものに対して極めて排他的でさえある。

欧米人による文化相対主義の受容は、他者に対して極端に「片立」の方向に走る傾向に歯止めをかけ、よりバランスの取れた志向性をもたらす効果があったのではないと思われる。文化相対主義による片立志向性の「水割り効果」である。言うまでもなく、両立志向型の日本人による文化相対主義の受け入れに同様の効果が望めるとは思われない。むしろ日本人の両立志向性に一層の拍車が掛けられると考えるほうが妥当ではないだろうか。そうだとすれば、日本人による相対主義の実

実践が、一見もっともらしく映る場合であったとしても、実際には文化の基層に横たわる「両立志向性」が変形しただけのことではないのか、と疑念が生ずるのである。外来思想の受容の際に起こるとされる「異文化屈折」<sup>9)</sup>や「文化的共鳴現象」<sup>10)</sup>が日本人による文化相対主義の受容の際に発生したのだとも考えられるのである。このことを考慮して、以下、前述したシミュレーションに則して、文化相対主義の下での日本人のコミュニケーションについて考察したい。

#### Ⅳ. 相対主義的同化型コミュニケーション

日本人による選択肢1)の採用は、往々にして、「臭覚」に関するコミュニケーション上の問題を棚上げする、「事勿れ主義的」かつ「対立回避的」なコミュニケーション型である場合が多い。両立志向型の一つに数えられる「同化型」の変種である。筆者はこれを「相対主義的同化型」と呼ぶ。この型の特徴は、「評価・判断の留保」や「寛容性の必要性」という文化相対主義の教えに倣って、例えば、個人的には例の異臭を問題として捉えながら、対人間ではそれを言語化（問題化）しない、という具合に相対主義の美名の下に「タテマエの同化」を実践するところにある。但し、この「同化」がタテマエであることに当事者自身が気付かないケースが少なくない。なぜなら、通常の「同化型」が相手である「個人」（社会的な強者である場合が多い）への同化であり、損得勘定の結果として「不承不承」行われるのに対して、「相対主義的同化」にあっては、何よりもまず「文化の相対性」という思想への同化（共感）があり、相手への同化は「共感」の結果として付随的に行われるからである。両者に共通するところは、両立志向型の最大懸案である他者との「対立回避」を手に入れることにあるのだが、後者の場合にはこの対立回避を「社会が賞賛する思想」を実践した結果として享受できるのである。

相対主義的同化型の欠陥は、明確に認識される必要があるだろう。対立回避を目論むこのコミュニケーション型では、まず、当事者の間に「問題は存在しない」と装うことによって、直面する問題の原因追及が覚束ないために、結果的に相手文化を認知し理解する機会を逸することが予測される。上の事例に則して言えば、例の異臭は「存在しない」ために、それが宗教上の理由による入浴回数の少なさに起因するという文化的背景を知り得ない可能性がある。更に、こちらの不快感を伝えることを避けるために、相手にこちらの文化（臭覚に関する）を理解させる機会を与えることができない。もっとも、相手の体臭を問題にするなど「失礼だ」という声もあろうが、「知的好奇心」という大義名分を掲げた上で、無礼にならない質問の仕方を考え出すこともできるはずである。他者への相対主義的同化は、往々にして問題の不在を装い、自己の感じ方や意見の表明を避ける傾向にある。このような上滑りの状態で、果たして異文化間の真の相互理解が成立し得るであろうか、大いに疑問の持たれるところである。

この相対主義的同化型のコミュニケーションは、すでに示唆した如く、「寛容さ」の息が切れた時点で、一転して「分立型」<sup>12)</sup>のコミュニケーションに変貌する可能性を持っている。両立志向型の一つに数えられるこのコミュニケーション型は、相手への同化が得られない、或いは得る必要

のない場合に発生し、相手とのコミュニケーション上の決裂を意味する。上の選択肢に則して言えば、1) から5) への突然の変換という形を取ることになる。コミュニケーションがある時点で一方的に放棄される（おそらく決裂の理由が述べられることもなく）ために、相手に不快感と誤解を与えて終わるコミュニケーション型のスイッチングである。

## おわりに

本稿では、異文化接触の一つの型である「フルコンタクト型」の状況における文化相対主義の問題点を日本人のコミュニケーション型との関連で考察した。日本人に顕著に見られる両立志向性によって、「異文化の理解」が相手への一方的な同化、それも「寛容な良き理解者風」を装った「相対主義的同化」という極めて歪んだ形で行われる可能性のあることを指摘した。「文化の相対性」に関するわが国における教育の在り方が、自らの自文化中心主義を抑制し「相手を理解する（相手に歩み寄る）」ことをその中核に据えた「両立の同化型」であるからかもしれないが、文化相対主義の論説を支持するのであれば、他者の自文化中心主義を容認しない姿勢も同時に確認されなければならないはずである。日本人による文化相対主義の実践が「偽善」の様相を見せ始める前に、そして学習者に無用の混乱を与えないためにも、今一度「フルコンタクト型」の異文化接触における文化相対主義の意義と可能性が再考される必要があるのではないだろうか。

## 註

- 1) ハンソン, F. A著, 野村博他訳『文化の意味』法律文化社, 1980年, 49-72頁。
- 2) 岡部朗一, 石井敏, 久米昭元『異文化コミュニケーション』有斐閣, 1987年, 120頁。
- 3) 佐藤勇治「異文化コミュニケーション教育と倫理」第6回日本コミュニケーション研究者会議における口頭発表用ハンドアウト, 1994年, 6頁。
- 4) 佐藤, 前掲ハンドアウト, 7頁。
- 5) 佐生武彦「異文化コミュニケーション・エシックスに向けて: 脱文化相対主義の勧め」, 学際研究第4号, 1997年, 6頁。
- 6) 遠山淳「文化の生成過程: その2 -情報淘汰とコミュニケーション型-」, 社会学論集, 第21巻, 第二号, 桃山学院大学, 1988年, 58-59頁。
- 7) 遠山淳「外来文化の受容過程: A Phylogenetic Approach」第4回異文化コミュニケーション幕張セミナーにおける口頭発表, 1994年。
- 8) 遠山, 前掲論文, 60-62頁。
- 9) 宇野善康他『国際摩擦のメカニズム-異文化屈折理論をめぐって-』サイエンス社, 1982年。
- 10) 矢野暢『東南アジア世界の論理』中央公論社, 1980年。
- 11) 遠山, 前掲論文, 60-62頁。